

な「のんき」で、経済面でも生活面でも余り縛られないので、簡単に結婚し、簡単に別れる若者が多い。

話を「芋」に戻そう。農業研究センターの樽本氏と石川氏は沖縄県離島の甘しょの収集を行って、下記のように離島の「んむ」の特徴付けをしている。

(1) 沖縄の離島には多種多様な在来品種がまだ多数残されている。

(2) 「うん（肉色に赤紫色のアントシアン系の色素がつく）」の品種が多い。

(3) 宮古群島に品種が多く、次いで西表島に多かった。

(4) 石垣市には蔓性の品種が多く、西表島には短蔓立性の品種が多く、宮古島には中間型の草型の品種が多い。

(5) 茎葉利用専用品種が数品種ある。

彼らが収集した品種は、合計 221 点にもなる。なぜ、離島にこれほど多くの品種が存在するのであろうか。私は、外国から伝播したのではなく、島内で自然に開花し、交雑した結果、多様な品種が形成されたと推察してい

る。先人は、貴重な品種を大事に後世に残したのであろう。一日三度食べる「んむ」に品種で変化を持たせたのではなかろうか。

今、これらの品種は亡くなろうとしている。

沖縄県には、年間20億円ほどの「さつまいも」が本土から入ってきている。かつて、「琉球いも」とまでも言われた面影は今はない。その原因は1960年代に侵入し、蔓延したアリモドキゾウムシおよびイモゾウムシのせいにもできるが、「んむ」を捨て、換金作物のサトウキビに走ったせいではなかろうか。サトウキビは1年半もかけ苦労し栽培してもわずかの収入にしかない。新甘味資源が続々出てきて、砂糖の将来はあまり期待できない。

沖縄県は、かつて、世界一の栽培面積を占める「沖縄 100 号」を育成したではないか。また、宮古島には日本に始めて「甘しょ」が伝来し、神として祭られている。

この辺で、「んむ」を見直してはどうだろうか。

常識法話

◆ 好意同乗者

好意で同乗を許した自動車の相乗りのことを「好意同乗者」と称する。自動車の事故が多発し、賠償金が高額化してくると、好意同乗者の事故と雖も、簡単に見逃してはくれない。従って、この好意同乗者の事故については、しばしば裁判沙汰になって、話題となっている。

好意同乗については、いささか不親切なようだが、断るにしくはない。

「急ぐから」とか、「寄り道をするので」とか、口実を設けて、同乗を拒否すること以外にはない。

そうでないと、好意が仇になって、大きな損害賠償になって帰ってくる。事故は瞬間のことであるが、ケガはその場で済むことではないのである。

その意味では、心を鬼にしてなどという表現は、少し大袈裟すぎるが、好意につられては駄目であることを銘記すべきである。